
秀才執事と無能なお嬢様

早市賢

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

秀才執事と無能なお嬢様

【Nコード】

N4369Y

【作者名】

早市賢

【あらすじ】

センター試験を受けにくく途中で女性を守るために刺されて死んだ彼は、異世界に転生してなんと執事に！？

これは努力で天才を超える執事と、無口で才能がからっきしのお嬢様の物語

プロローグ（前書き）

人生で初めて小説を書いてみました！

暇つぶしにでも読んで頂けたら嬉しいです！

ブローグ

センター試験

全国のおよそ九十八パーセントの高校生及び浪人生が受ける日本の共通試験のことだ。

この試験の結果によつて、あるモノは門前払いされ、あるモノは門をくぐり抜け、あるモノは次のステップに行くことが出来る。国立に行くものにも、私立に行くものにもとても重要な試験だ。

「・・・・・・・・」

そして彼もまた大勢の学生と同じように試験を受けるべく電車で体を揺らされていた。

特徴のない容姿と体躯のただの一般高校生。

強いて挙げるならその彼の瞳だろう。

それは別に目の色のことではない。彼は他勢と同じの黒い瞳だ。

ただ、その瞳から周りの人が肌で感じる事が出来るほどの何かを放っていた。意思、自信、好奇心、興奮、緊張、覚悟、そして高揚。彼の瞳はそんな彼のあらゆる感情が巡りまわっていた。

「次は〱東本郷〱、東本郷〱」

電車のスピーカーから降りるべき駅を告げられた彼は、わずかに笑みを浮かべ、ついに瞳の感情を顔に出した。

まるでこの先に最高の楽しみが待っているような、そんなことを思わせる表情だ。

彼は根っからの挑戦者だ。どんなに才能がないとか、絶対に勝てないとか、そんな自分にとっての壁が立ちふさがることに、異様なまでに胸を躍らせ、またその目標に向かって努力することが大好きだ。

った。

だからこそ、今日のセンター試験にもまた胸の高ぶりを感じているのだ。

キキーツとカーブする音の後、電車はスピードを徐々に落としていく。やがてホームに入り込む時の独特の空気の変化を感じ、彼は立ち上がった。

と、そこで――

「!?!」

視線の先できらりと光る鋭く上がった何かを持っている男と、それを背中に突きつけられそうになっている女性がいるのに気がついた。女性はまだ気づいていないようだ。

男は何やら思いつめたような顔つきでわずかに腕を引いた。

（まさか・・・!?!）

本当に刺すつもりなのか？と思考を進める前に体が勝手に動いていた。

人と人との間を素早く最小の動きで避け進み、男が腕を前に突き出すその瞬間に――

「うぐっ」

二人の間に張り込んだ。

そしてそれと同時に、アナウンスが流れ電車のドアが開いた。

雪崩のように人はドアからホームに降り立ち、ある程度いなくなつたところで誰かが悲鳴を上げた。

彼のその惨状を見つけた誰かだろう。

彼はその悲鳴を最後に耳に残して——意識を闇の底へと沈めて行った。

ペシペシペシペシ

「んんんっ」

何やら頬を叩かれているような感触がする・・・

・・・？

あれ？ 意識がある？

彼はゆっくりと目を開く。いきなり眼に入り込んできた光に顔をしかめ、手で光を遮る。

徐々に慣れてきた視界を確認するかのように何度か瞬きをし、ポツリと呟いた。

「ここどこだ？」

白。

その一言で十分な部屋。・・・いや、空間だ。

何もない。壁もなければ扉もなく、扉もなければ家具もない。そしてさらには・・・床もない。

「なんだここ？」

脳内中枢機関では理解不能と表示されているこの空間。彼は思考をそこでやめて周りを見渡した。

「……………」

「……………」

「……起きた？」

「……………」

ちょうど横に顔を振ったところだった。

目の前にいるのは五歳くらいの男の子。外人っぽい顔のイケメン・
・いや、そういった類のものではない。温和で純真無垢そうな、ど
ちらかと言えば女の子のような顔だ。普通なら女の子と間違われて
もおかしくはない。そのくらいのレベルだ。

「ねえ、起きた？」

ただ彼が間違えることはなかった。

「ねえってば！」

それは――

「……なんで裸なんだよ」

「ん？」

「だから……何で裸なんだよお前！」

眼の前の男の子は……裸だった。

「さて、自己紹介するかな。僕の名前はアース。地球を担当する神
様見習いだよ」

服を着た男の子、アースは胸を張って自慢げにそう言った。

「……………」

「何か反応してくれないかなあ？」

「いや、何て言えばいいんだよ？」

刺されたはずなのに目が覚めたらこんな白一色の発狂しそうになるくらい何も無い空間にいて、挙句の果てには眼の前の男の子は自分で神様……の見習いだと言っている。

まだ十八年しか生きてきていない彼に、そんなことを一遍にいきなり突然突きつけて一帯どんな返答を求めているのだろうか。

「……俺は神代連だ……いや、です」

彼はとりあえず自分も自己紹介をするという一回限りの抜け技を使った。

「別に敬語とか使わなくてもいいよ。僕は神様見習いだから君と近い存在だし」

「？」

彼が首をかしげると、アースは面白そうに笑みを浮かべた。

「まずは君に現状の説明をしてあげようか。まあ、分かってはいると思うけど、君は一月十八日に電車の中でアイスピックを背中から根元までぐさりと刺されて、十八歳という若さでお亡くなりになりました」

「え……………」

亡くなった？

・・・死んだってこと、か？

彼の頭の中では『死亡』という言葉が走りまわっている。
確かに記憶にある。

自分が女性を守るために間に入ったこと、そしてそのタイミングが悪くて刺されたこと、最後に誰かが悲鳴を上げたこと。

「・・・・・・・・」

すべて記憶にあった。

「俺は・・・死んだのか」

自分を認識するようにふと口から言葉が漏れた。

「気付いてなかったんだね。君は生きている頃はすごく聡明な人間で通っていたからてつきりこの状況を冷静に分析していたと思ったよ」

「・・・で、俺は死んだのになんで意識があるんだ？」

彼は現状を認識し素早く次のポイントに話を進めた。この切り替えの速さこそが、彼が聡明と言われる所以なのかもしれない。

「ふふふ、それはね君の魂が濃いらなんだよ」

「魂が濃い？」

「そう。万物全ての命を持つものは必ず魂と言うのが存在する」

「犬や猫も？」

「それだけじゃない。木や草や花もまた然りだよ。これらは命を失うと天界へ魂となって送られてくる」

「それで？」

「実はその濃さで魂のその後を決定するんだよ。ただ、普通は精々天界の仕事に就く、くらいなんだけど、君の場合はそれはとても濃くても濃い魂で、君と言う存在を死してなお、表しているほどなんだよ」

正直、彼にはアースの言っていることを大まかにしか理解できなかった。だが、何となく言いたいことは分かる。

「要は、他とは違うんだろ？」

「うん、まあ、そんなところだね。それでね、君はそれだけまだ魂が濃いならもう一度命を持つことだって可能なんだよねって話し。分かる？」

「・・・・・・つまり、もう一度生きることが出来るってことか？」

「うん、その通り。あ、だけど元いた世界に戻ることは出来ないよ。世界で命が尽きたらもう世界から拒絶されるからね」

「じゃあ、どうすんだよ？」

「うん、君には僕の管轄下でない違う世界に行ってもらおうよ」

「異世界か？」

今の今まで頭が回らなかったけど、これは小説とかにあるヤツと同じなのか？

「その通りだよ。君は神代連ではなく全く違う人間として新たな命を得るんだ」

そう言うや否や、アースは指をパチンツと鳴らす。

「それでは、よい人生を」

え、と彼が疑問符を浮かべたところで、いきなり目の前が真っ暗になった。

プロローグ（後書き）

アドバイスなどがあれば是非ください！

生まれて二時間後に決まってしまった。(前書き)

一話目です！

生まれて二時間後に決まってしまった。

目が覚めたら知らない天井が見えた。

何ていうどこかで聞いた様な台詞を口に出そうとして、彼は詰まった。

「……っ！ ……っ！」

声が出ない。

今まで当たり前のように出していた声が出なかったのだ。

（どういうことだ！？）

彼は焦りに心を任せ、がむしゃらに声帯を響かせようと息を吐き出した。

徐々に温まってきたのだ元は、やがて彼に以前の、いつも普通に話していた感覚を彷彿させてくる。

（後もう少し……っ！）

うっうっうっ、とのどからわずかながらに音を発し、彼は最後の一息、と言わんばかりに声帯を鳴らした。

「オ、オ、オギヤアアアアアア！」

（や、やっと声が出た……ん？）

と、思ったところで耳に響いてきた自分の言葉を脳内で再生した。

オギヤア。

……オギヤア？

(どういうことだ？)

疑問に思いながらもう一度声を上げる。

「オギヤアアッ！ オギヤアアッ！」

(……おいおい、何だよ、この母性本能をくすぐるような声は！？)

自分が出している泣き声に混乱する。

そんな彼に追い打ちを掛けるように彼の頭上から高く透き通った声が出た。

「あらあら、やっと泣いてくれたわねえ？」

声に合わせて上を向こうとした、が、首が短いためそこまで動かすことが出来なかった。

仕方ないので眼球を一杯に動かして、声を発した人物を捉えた。
スカイブルーのような蒼い髪に、パツチリとした目元、その中で彼を優しく包み込むように見つめている、髪同じ蒼い瞳。それらを際立てんとばかりにほっそりとした輪郭。彼が今まで見てきた中で、確実にトップスリーに入るレベルの美人であった。

「おーよしよし。ママですよー」

（え！？ ママ！？）

心の底では驚いている彼を横目に、女性は「よちよちね」と笑みを浮かべながら、彼の体を揺りかごに乗せた様に動かす。どうやらこの女性が彼を抱いているようだ。

「ナンシー！ 俺にも抱かせてくれよ！」

女性の隣に立っていた男性が声を上げた。

急に出てきた男にびっくりした彼は、誰だお前は！？ とつい口が開いてしまい――

「オギヤアアアアッ！ オギヤアアアアッ！」

つんざくような泣き声を轟かせてしまった。

「ほら、アナタ。急に大声を出すからこの子が驚いちゃったじゃない」

と、ナンシーと呼ばれた女性は「よちよちね」と彼をなだめた。男は「むっ」とうなだている。

「もう、落ち込まないでよ……、ほら、この渋い人がパパですよ」

ナンシーはそう言いながら、男の顔の位置まで彼を持ち上げる。オールバックで決めている茶髪に、慈愛のこもった茶色の瞳の、ほりの深い顔立ち。顎下に伸ばしている髭は、中世の英国紳士を彷彿させる。ナンシーは渋いと言っているが、決してそんなことはなく、むしろ品性がにじみ出るように整った顔立ちをしていた。

そんな整った顔をくしゃめて、男は目の前に来た彼に、

「パ、パパですよ」

と、緊張したようにハスキーボイスを、無理やりアルトまで上げたような変に高い声で彼の頬をプニプニと触った。

（く、くすぐりたい……）

頬に伝わる触感に耐え切れず、指から逃げようとする。

そんな様子に男は心を打たれたようで、

「ナンシー！ こいつはかわい過ぎるぞ！」

と、興奮気味に叫ぶ。

ナンシーは呆れながらも、幸せそうに笑いながら言った。

「当たり前よ。なんてったって、私とあなたの子のなのよ？」

その言葉に、彼はようやく頭が冷え、理解を速めた。

（……これが『君は神代連ではなく全く違う人間として新たな命を得る』ってことかよ。あの野郎……俺に有無を言わずに実行しやがって）

何の説明もなく、あなたは転生できます、からいきなり飛ばしたあの神の見習いに対して、若干むかつく気持ちもあったが、なにはともあれもう一度生きる機会をくれたことで、彼は怒りを霧散した。

（異世界……か。どこがどう違うかまだ分らないが、とりあえず幸せそうな家庭に生れてきたみたいだな）

目の前の幸せそうに笑っている夫婦を見て、彼はそう思った。

「オギヤアアアアアっ！ オギヤアアアアアっ！」

しばらく両親に顔で遊ばれていると、遠くの部屋から大きな泣き声が聞こえた。

「どうやらミーシャ様も無事に済んだみたいね」

「ああ、そうだな」

泣き声を聞いて、二人はホツとしたように顔を見合う。

（……知り合いなのか？ いや、それにしても『様』付けてことは——）

「じゃあ行ってくる、ナンシー」

「ええ、アナタ」

ナンシーから男のかごの中に渡り、彼は男と一緒に部屋を出た。部屋から出て彼が真っ先に脳裏に浮かんだのは中世ヨーロッパのお屋敷だ。よくドラマとかでも扱われるような、西洋のレトロちっくな建物。

内装はそれこそゴミ一つなく、廊下を全て覆う赤い絨毯。置物はどれも歴史を感じさせる紋様の美しいモノばかりだ。きっと高価なものなのだろう。壁の絵もまた然りだ。

廊下をしばらく真つすぐに歩いて行くと、行き止まりのように立ちふさがる扉がある。

男が扉を「グレイガです」とノックした。

中から男の声で「入れ」と許可が出たので、二人はその扉を開けて中に入った。

「失礼します」

「おお、グレイガ。見るに、お前たちも無事に済んだみたいだな？」

かつぶくのいい男性が、彼に視線を送りながら二人に近づいてくる。

「はい、旦那様のお陰でございます」

先ほどまで生まれてきた息子デレデレの表情を見せていたの誰だろうか？と疑いたくなるくらいに礼儀正しく、キリツとした姿勢の男が彼の目の前にいた。

「いや、さすがにナンシーの方が君にとっては大事なはずだ。これは当然のことだよ」

「いえ、旦那様のお心遣い感謝していますので」

「むうう、君は堅苦しいな。……ところで、その子の名前は何と言うのだ？」

照れくさいのだろうか、そつぽを向きながら話題を変えるかつぶくのいい男性。

（そういえば俺もまだ知らないな）

「この子の名はレイルでございます」

「ほお、レイルか。いい名だ」

「ありがとうございます」

「さて、せっかく来てくれたんだ、うちの新しい家族を見て行ってくれ。特にレイルにはとても大事なことだしな」

（大事なこと？ 何だ一体？）

「かしこまりました」

男性の後ろに、彼ことレイルとグレイガの三人はベッドまでついて行った。

「ミーシャ、グレイガと二人の子のレイルだ」

「奥さま、ご出産おめでとうございます」

グレイガは丁寧に軽く頭を下げる。

ベッドの上に座っているミーシャと呼ばれる女性は、少し弱弱しさを醸し出しながらも、笑顔で答えてくれた。

「グレイガ、あなた達もおめでとう。レイル君、初めまして」

赤ん坊のレイルの頬をツンツンと突ついている。

（なんでみんな俺の頬を触るんだろうか？）

赤ん坊の頬にはとんでもない魅力があることを知らないレイルはくすぐったくて仕方がなかった。

「グレイガ」

男性に呼ばれてグレイガ振り向く。

それによってレイルの視界も一回転した。

「この子がうちの新しい家族のリーナだ」

その赤ん坊は黒髪の女の子だった。

「初めまして、リーナ様」

グレイガは目の前の赤ん坊にお辞儀をする。

赤ん坊にお辞儀をするいい年の大人とは、はたから見ればかなりおかしい絵図に見えるはずだ。それなのにも、頭を下げる……。今までの応対とこれで、レイルは自分の父親の立ち位置を把握した。

（この家の使用人つてところか。でも、地位はそんなに下じゃない。少なくとも雑用のレベルの気品ではない。もっと上の……使用人で上つてなんだ？）

「ほらレイル、この方がリーナ様だ」

と言って、レイルをリーナに近づける。

（……いや、何をしろと？）

赤ん坊のレイルに何を求めているのだろうか、とグレイガの神経を疑いたくなったレイル。

そんなレイルの気なんて知る由もなく、グレイガは先ほどの使用人モードと始めに見せた親ばかモードを混ぜたような、そんな顔つきで話した。

「いいか、レイル。この方はな、これからお前が命を掛けてお守りする方だぞ」

（は？）

「お前、リーナ様の盾となり、矛となるんだ」

（え、ちょっと、確定事項？）

「……お前は、リーナ様の執事になるんだ」

異世界に転生してきた旧『神代連』こと、レイルは、生まれてわずか二時間ほどで、職業が決定した。

生まれて二時間後に決まってしまった。(後書き)

三人称難しいですね。
精進していきます。

三歳の決意（前書き）

なかなかうまく書けません……

三歳の決意

この世界には四つの大陸が存在する。

西のユーレン大陸、東のアイド大陸、南のフレンク大陸、北のワシルト大陸。

この四つの大陸の中でもっとも広大かつ多くの人間が住まう大陸、西のユーレン大陸。

そのユーレン大陸は五つの大国と周りの群衆列国によって成り立っていた。

その五つの大国の一つ、アグネシア帝国。

この帝国は周りの大国に比べるとかなり特殊な考え方を持っていた。曰く、「力のある者ならば平民だろうと貴族だろうと関係なし」

要は実力主義国家ということだ。

これは非常に珍しい考え方だ。

周りの大国は、血族というものに重を置いている。

それゆえに国に使える者の八割は貴族の者たちだ。

それがたとえ、どんなに無能であったとしても、どんなに愚かな考え方しかできないとしても、貴族であるという理由でエリート街道を歩むことが出来るのだ。

だがアグネシア帝国は、それでは国がいずれ崩壊する、と考え実力主義を確立させたのである。

とはいえ、貴族というのは影響力が多大にある。

それは国の幹部でもあり、代表でもあり、国のレベルを示すものでもある。

つまり貴族をおざなりにし過ぎては、他国に示すものがなくなってしまう。

そこで貴族のシンボルを定めた。

どんな状況であつても、国のため、民のために粉骨砕身する気で政務に携わる。

それがある種義務付けられている選ばれた上位貴族。

『帝国十二貴族』

その十二貴族の一つ、『フォーレント家』に代々仕える執事の名家『ハーベンス家』の第一子として生まれたのが、レイル・ハーベンスだ。

レイルの父、グレイガ・ハーベンスは、現フォーレント家の当主、トーク・フォーレントの執事として長年仕えてきた。とても優秀とことで、グレイガを欲しがっている貴族は大勢いるらしい。

そしてレイルの母、ナンシーと出会ったのは、フォーレント家の屋敷で、当時のナンシーはメイド長だったそうだ。

結婚してから二人は改めて夫婦ともどもフォーレント家に仕えている。

そんな二人の息子のレイルも、フォーレントに使えるのは当然だろう。

それがグレイガの言った『リーナ様の執事になる』ということだ。

彼がこの異世界のこと、そして自分の家のこと、自分の仕えている家のことを知ったのは、二歳の時のことだ。

一歳の時は、常に襲いかかってくる睡魔と、上手く回らない舌、そしてなによりも思考の回転速度が以上に遅くなったこと。

この三点によって、享年十八歳のままでいるはずのレイルがこの世界のことを理解するのに時間がかかったわけだ。

しかし、二歳で理解したと言っても、それは全てにではない。

この世界の言葉は聞きとれるものの、読んだり書いたりするのはまずできない。

さらにこのアグネシア帝国が周りの大国からどういう評価を受けているのかも、あるいは各国々の力関係と勢力、同盟など、知らないことが山ほどある。

もちろんレイルはいち早くそれらの情報が欲しかった。

二歳とはいえ、情報は覆いに越したことはない。

だが、残念ながら知る術がなかった。

本は読めないし、誰かに聞きに行くにしてもどのように聞けばいいのかわからない。

いきなり「この世界ってどんな風になってるんですか？」なんて聞く二歳児がいたらどうだろうか。確実に不気味に思われ、これらの対応がぎくしゃくして行ってしまう。

それに、まだ脳の反応速度が遅い。

言われたことをすぐに理解するのが難しいのだ。

少し頭を捻って自分で補わないと理解できないようなことを言われると、思考が強制的に遮断される感じがした。

だから、いくらか成長して行くうちにこの世界に慣れて行って、いずれ理解できるだろう、と結論付けて、レイルは悔しく思いながらも、情報収集を止めた。

そして今現在、レイル三歳。

レイルはリーナと二人で一緒に絵本を読んでいた。

タイトルは『英雄騎士と王女様』

かつて遠い村の農民だった少年が、子供の頃に命を救ってくれた騎士に憧れて騎士になり、帝都の騎士団に入団する。

少年はやがて青年となり、身体、精神、実力ともにすさまじい成長を見せ、帝国第一王女の近衛騎士にまで上り詰めた。

ある日、王女様は魔王の仕組んだ罠によって連れ去られてしまった。青年は、王女様を助けるために一人で魔王の元に向かう。

そこで魔王と青年の熾烈な戦いの末、青年は魔王に勝利し、見事に王女を救うことに成功した。

王女を連れて帝国に帰還した青年は英雄騎士と称えられた。その後、青年と王女は結婚し、幸せに暮らしましたとさ。

という、どこにでもありがちな童話だ。

しかし、レイルはこの絵本を読んで、帝国の姿勢が本当に『実力主義』であることを改めて認識した。

（普通は童話に農民が活躍する話なんて認めないだろう）

農民の成り上がり物語、とレイルはこの童話を解釈し、これによって帝都から離れた農民にも希望があることを示しているのだと判断

した。

「きししゃま、かつこいいでしゅね？」

魔王と戦っている場面を描かれている絵を指差して、レイルはリーナに話しかけてみた。

三歳になってだいぶ舌が回るようになったが、いまだにサ行やハ行がはつきりと言うつことが出来ない。

レイル自身、今は慣れたが、始めの頃はかなり恥ずかしかったという。

「……………（こくり）」

リーナは表情を変えずに淡々と眺めている。

その大きな瞳は髪の色と同じで黒。透明感にあふれている、何か不思議な黒だ。

その瞳には何を写っているのだろうか？ 考えさせるような、そんな色である。

リーナと言う女の子は三歳にして『無口で無表情』というイメージが定着していた。

言葉をあまり話さず、最低限の会話しかない。

いや、それすらも最近では顔を小さく縦に振るか、横にするか、でしか会話を成立させてなかったりする。

「……………」

だが、考えれば単純なことで、そんな「イエスかノーか」を訴える仕事草」とでは会話が長続きするはずがない。

「おうじょしゃま、きれいですね?」

「……………(こくり)」

「なんだかたのししょうでしゅね?」

「……………(こくり)」

「……………」

「……………」

(もう……………話題がない)

己の頭の回転の悪さに呆れ、レイルは寝転がって天井を見つめた。そして、急に睡魔がさざ波のようにレイルの体を襲って来た。

(もう寝よ)

レイルは静かに瞼を閉じる。

徐々に体温が程良く上昇し、体の力が抜けて行く。

脳内では、すべての機能を一時停止させるべく熱が集まり、まるで潮が引くみたいに、スーッと熱が冷え、意識を闇の中に落としていった。

夢を見た。

それはまだ、自分が『神代連』であった頃の夢だ。

病弱な母と二人で暮らしていた時のことだ。

それはもう、ずっとずっと昔のことで、もう二度と戻ってこなくて、『神代連』という人間を生んでくれた、彼がもつとも敬愛し、宝物であった『母』との思い出。

——最後に抱きしめてくれたあのぬくもり

夢の中では、彼は『神代連』だった。

「……………んんっ」

夢から覚めたレイルはゆっくりと瞼を開けた。

いきなり視界が明るくなって、思わず目を細める。

明るすぎて真っ白だった視界は徐々に晴れて行き、黒い瞳と目があつた。

「え？」

黒い瞳はレイルを覗き込むように見つめていた。

その姿が一瞬、一瞬だが、昔の母のことを思い出させたので、レイ

ルは驚いた。

頭では理解している。

三歳の子と、自分の母親を間違えるなんておかしい。

だからこそ、見間違えだと分かった。

だが、

（雰囲気……似ている）

穏やかな雰囲気。

何もかも包むような、けどどこかそっけないような、そんな優しい雰囲気。

（そういえば、あの人もあまり話す方ではなかったな）

リーナの手がレイルの頬に触れる。

「……………」

そして少女は首をかしげた。

いつものレイルなら、これだけの動作で、リーナの言いたいことを理解するのは不可能だ。

だが、今のレイルは不思議と、自然に、まるで脳内に直接意志が送られて来たみたいに分かった。

「泣いてないでしゅよ」

リーナはその返答に、その無表情をわずかに和らげた。

この時、レイルは思った。

それは、母と重ねているから、あるいは少女自身が醸し出す空気によるものか、分からないけど、レイルは胸の中で、この世界に来て初めて自分から思ったのだ。

守りたい、と。

三歳の決意（後書き）

雑になってしまったかもしれませんね。
次気を付けます。

脇役の仕事（前書き）

開いていただいております。

脇役の仕事

執事とは何か？

レイルは自分がこの先目指す職業について、その根本を考えてみた。よく、仕事に就く理由が「給料が多いから」とか「箔がつくから」とか、あるいは「これになるしかなかった」という人を、前世で何度が聞いたことがある。

人は誰しも、なるべく得をする方を選ぶ。

その後の人生のことを考え、どちらが得かを目ざとく見分け、「幸せ」を求めて選択するのだ。

その場合の「幸せ」とは何だろうか。

金だろうか、女だろうか、向上心だろうか、好奇心だろうか、野望だろうか。

いろんな目的に相對して、いろんな「幸せ」がある。

では、レイルはどんな幸せを求めているのか。

「……………」

現状三歳の子供が考えることではない。

能の回転は未だにもとの自分ほどには戻る気配もなく、理解するということにいちいち一苦労する毎日だ。

でも、彼は実際二十年も生を経験している。

経験と言うのは重要だ。

百聞は一見にしかず、という小学生でも知っている単語があるが、

そんな小さい子でも知っているがゆえにとっても重要だという。

聞くのと、体験するのでは、体の根幹で得る経験値が全然違うのだ。その経験上、「これになるしかなかった」という人がいつも言っているのは「もつと前からやっておけばよかった」という言葉だ。

拙いながらも十八年間、人生と言う者を歩んで、準備の大切さを十分と言う程に知っている。

だからレイルは考える。

——自分はどんな幸せを求めているのか。

（つつても、今じゃリーナを守るくらいしかないんだよな）

先日、レイルはリーナの持つ独特の雰囲気奥に、生きていた頃の母の空気を感じた。

その空気に感化されたのかは分からないが、彼は不意に「守る」「ことを誓った。

ただ、「守る」という行為をするには、必ずしも執事にならなければならぬのだろうか。

もしかしたら、もつといい「守る」ための手段があるかもしれない。

レイルの前世からの信条は「チャレンジ」と「先の先まで考える」だった。

常に最悪の場面を想定して、出来る限りそうならないように最善の手を考える。どの場面でも動き、場面場面においての可能な限りの行動パターンを考える。

常に思考を張り巡らせて、予定外の出来事を減らす。

それが、レイルの「先の先まで考える」である。

（ボディガード……は執事と変わらんだろうし、冒険者になってもなるか？ いや、そこら辺の制度はまだ知らない。第一、それだったら

執事となつて常に近くにいたほうが安心だろう。……つーことは、やっぱり、執事以外でリーナを守る職業ってのはないのか。学校に通う際だって、どうなるか分からないけど、執事なら近くにいても問題はない）

そこで結局、執事になるのがベスト、という結論に帰結する。

そしたら、次に新たな疑問が浮かんだ。

それが『執事とは何か？』である。

夜の七時になろうとしている時間、グレイガとナンシー、そしてレイルの三人は、フォーレントの屋敷の一室であるハーベンス家のリビングで夕飯を取っていた。

グレイガとナンシーの仕事が終わるのはかなり遅く、いつも深夜近くであった。

しかし、今日はたまたま、フォーレント家当主であるトークの仕事が早く片付いたため、こうして家族三人で食事にありつけたわけである。

レイルは不器用にナイフとフォークを駆使して、眼の前にあるお肉を切り取る。始めは真っ直ぐに切れるかと、期待したが現実は厳しく、途中からどんどん曲がっていつてしまい、三角形のお肉が出来上がってしまった。

「はっはっは、レイルにはまだ難しいかもなあ」

「うふふ、そうね。でも、いつかちゃんとできるようになるから、頑張りなさい」

レイルは「はい」と答え、次に取り掛かる。

それを二人は微笑ましそうに、笑顔で眺めていた。

二人とも、久しぶりの三人での夕食に機嫌がかなりいいようだ。

レイルは次も失敗して三角形になってしまったお肉をフォークで丁寧に差し込んで口に持つて行く。

もぎゅもぎゅ、と噛み砕くことに甘いソースが口の中に広がり、ついついレイルの顔を笑顔にしてしまう。柔らかい肉をしっかりと噛んでから咀嚼。満足が残るこの感じが、おいしいモノを食べていると実感させる。

その余韻に浸りながら、次のお肉に行こうとして、レイルは手を止めた。

「おとうしゃま、しつじつてなんでしゅか？」

いきなりの質問にグレイガは、驚いた様な顔をするが、すぐに笑顔に変える。

「レイルは執事になりたいのか？」

そう言われて、レイルは「うん」と首肯をする。

そんなレイルを見るなり、グレイガはうれしそうに顔をくしゃめた。

「そうかそうかそうか！ 執事になりたいのかあ」

「ふふふつ、レイルはお父さんみたいになりたいの？」
「はい」

実際、グレイガの仕事の様子なんて、あまり見る機会がないからどんなのかは分からないけど、そう言っというた方が都合よく感じるし、変な説明をしなくていいので、レイルは頷いた。

「そうだなあ、執事ってのは……脇役だな」
（……は？）

グレイガは品良く整えられたあごひげをなぞりながら、本職の者とはあるまじき言葉を発した。
レイルはポカンとした顔でグレイガを見る。

「あなた、それはいくらなんでも……」
「ナンシー、いくら三歳だと言っても、俺はレイルに嘘をつく気にはならない。確かに夢を壊してしまうかもしれないけど、それでも本当の『執事』ってのを受け入れて、執事になってほしいんだ」
「……あなたがそう言うなら、いいけど」

ナンシーは諦めたようにグレイガを見てから、心配そうにレイルを見る。

「いいかレイル、執事ってのは、絵本に出てくる勇者様みたいに日に誰からも愛されるような仕事じゃないんだ。常に、主という『光』を一層輝かせるために『闇』となる。主が舞台の主役ならば、執事は脇役——いや、照明だ。常にいる者として扱われ、それでも主のために、駆けまわる。それが執事だ」

グレイガ一気にそう言い終わってから、近くにある水でのどを潤す。

それからレイルの頭に手を乗せて優しくなでた。

「まあ、まだレイルには早いかもしれないが、これだけは分かってくれ。執事は確かに目立たないが、それでも俺は、旦那様のもとで執事が出来ることを、心の底から誇りに思っている」

「あなた……」

「だからな、お前もそう思えるような主を見つけろんだ。……それがリーナ様と言うのが一番いいんだがな」

最後に苦笑いをして、レイルの頭から手を放した。

二人がレイルの口が開くのを待っている間、レイルは頭の中で思考を巡らせている。

（主が光とすれば執事は闇、主を主役だとすれば執事は脇役や照明。……はははっ！）

レイルは胸の中で笑った。

（そんなの——俺にピッタリじゃないか！）

「おとうしゃま、ぼくきめました」

レイルは小さく息を吸って、言った。

「ぼく、しつじになりましたー！」

脇役の仕事（後書き）

次から、この世界の魔法について書こうかと思っています。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4369y/>

秀才執事と無能なお嬢様

2011年11月18日05時08分発行